CASE 34

3～5歳児

身近な自然と関わる子どもたち

協力園
認定こども園
ひまわり幼稚園

（幼児の実態）

10月、園庭中央の絵具のコーナーでは、園庭で見つけた葉っぱや、収穫したサツマイモの切れ端が置かれていました。子どもたちは、大きな葉っぱや芋の切れ端に筆で絵の具を付けたり、スタンプ台を使ったりしながら、形を紙に写し取ることを楽しんでいます。また、白い模造紙を園舎の壁や窓一面に貼り、大きなキャンバスを作っているコーナーもありました。ここでは、画家のように立って描けることが魅力のようです。

園庭を奥に進んで行くと、『ひまわりの森』と名付けた遊び場がありました。そこには、草花が自然に生えるように、保育者があえて手を入れない空間をつくっています。園の柿の木には沢山の実がなり、自分たちで採って食べることもできます。

職員で作成した『園庭植物マップ』

葉っぱで洋服の模様を作る年少児

雲を見て天気の予想をする年中児

公園で見つけたヤモリの家を作る年長児

園庭の葉っぱを使った遊び

『ひまわりの森』から、取れないな。」先生に取ってもらおうよ！」と、年長児たちの声が聞こえてきました。これまでは、友達に枝を下げてもらったり、ビールケースに乗ったりして、自分たちで柿を採ることができましたが、年中児に採ってあげた後は、倉庫よりも高い枝にしか柿が残っていません。年長児たちは、年少さんにも、取ってあげたい。先生、柿を取って！」と、保育者に頼みました。保育者が来ると、他の年齢の子どもたちも集まってきます。保育者は、手作りの柿採り網でやってみますがうまくいきません。見ていた子どもたちからは「あー」と、残念そうな声が聞こえてきました。年長児たちが「ぽい、これ使って。」と、自分たちがビワやサクランボを採る時に使用したビールケースを持ってきて、保育者の採る様子を見守ります。

年少児が『ひまわりの森』にやってきて、葉っぱを摘んでボウルに入れています。葉っぱがいっぱいになると、年少児クラスのテラスに行きました。そこには、緑のカラーポリ袋の洋服と、セロハンテープの台が置かれています。保育者が準備していた茶色の落ち葉だけではなく、自分で摘んできた葉っぱで、洋服の模様を作ろうとしていたことが分かりました。形や大きさ、微妙に色の違う葉っぱをセロハンテープできれいに貼っています。

『ひまわりの森』の大きな木の横に、友達とビールケースを運んで基地を作っている年中児がいます。ビールケースを階段状に積み上げ、4段の高さにしていました。ビールケースに座ると、空が近く感じたのか、3人は空を見上げていました。ポツッと、A児の顔に雨がかかりました。天気予報、あの雲がこっちに来てね、あと、1時間で雨が降ります。」と、近くにいた保育者に説明し始めました。A児は遠足の日の天気が気になり、毎日、母親と天気予報を見ているようです。

A児と一緒に空を見ていたB児は、目の前にある大きな葉の虫食いの穴に気付きました。木の幹に目を移すと、幹を上ってくるアリの行列を発見し、アリって葉っぱを食べるのかな？」とつぶやきました。B児のつぶやきに友達は、アリは、葉っぱなんて食べないよ。何か、他の幼虫がいるんじゃないの？」と、答えています。

年長児のC児が飼育ケースの紐を肩にかけ、友達と一緒に『ひまわりの森』にやってきました。C児は昨日、お母さんと公園に行って、ヤモリ見つけた！一緒におうち、作ろうよ。」と、友達を誘っています。友達が来もいるよね。」と言うと、2人で砂場に行き、しばらくして、砂場の手押し車に砂を入れて戻ってきました。2人は庭の端っこに生えていたエノコログサを抜いて砂に挿し、手押し車が箱庭のようになりました。C児はヤモリさん、おうちができたよ。」と、ヤモリを草の上にそっと乗せ、指で背中を撫でました。C児は、近くにいた保育者に「一緒にヤモリのおうちを作ったよ。」と自慢気に話します。保育者は、そう。」と、うなずきながらC児の話を聞いていました。

片付けの時間になった砂場には、ハート形の大きな葉の上に、小さくて茶色のツルンとした葉と、葉脈だけの葉、小石を乗せているものがありました。その横には、砂場を麺棒で平らにして、さらにまな板を置き、砂をカップで型抜きしたものがありました。それには、小さなハート形の草やエンドウの蔓を飾っています。子どもたちは、遊びに必要な材料を自分で選び、遊びに取り入れていました。

子どもたちは、園の身近な自然環境に主体的に関わり、自分たちの遊びに取り込んでいるようです。その関わりの中で、試行錯誤したり、考えたりし、遊び込む体験をしていると思われます。子どもたちが、自然の不思議さや美しさなどに直接触れる体験を通して、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われていくことを期待します。

事例から見られる10の育ち

自然との関わり・生命尊重

年長児は、繰り返す四季を通して、友達と柿を美味しく食べた体験から、年少児に柿を採ってあげたいと、試行錯誤したと思われる。

年少児は、園庭の草木の場所を把握しているのか、洋服の柄に合う葉を見つけようとイメージを広げていると思われる。

年中児のA児は、遠足に行きたい思いから、天気予報による気象に関心をもち、雲と雨を関連付けながら、考えたことを保育者に伝えていると考える。B児たちも、虫食いの葉とアリの行列を見たことで、アリの食べ物について考えを伝え合っていると思われる。C児は、公園で見つけたヤモリの家を作り、草にそっと乗せたり、撫でたりしてかわいがろうとしている。

このような自然に関わる体験を通して、自然の変化を感じ取り、考えたことをものや言葉で表現しながら、身近な事象への興味や関心が高まっていることがうかがえる。また、小動物に愛着をもって関わる中で、かわいがるだけでなく、命あるものとして大切に扱おうとする姿も見られるようになると考える。

事例から見られる10の育ち

豊かな感性と表現

子どもは、園庭の環境から探してきた葉やつるを使ったことで、自分のイメージが表現できていることを楽しんでいると考える。また、砂遊びを通して、砂の性質に気付き、型抜きがきれいにできるように工夫していると思われる。

自分なりに表現することの喜びを味わう体験を基に、様々な素材の特徴に気付くようになり、5歳児の後半には、必要なものを選んで表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりするようになってくると思われる。

自然との関わり・生命尊重
保育者の援助・環境構成のポイント

保育者自身が、自然の状況を把握し、楽しみながら保育をする中で、幼児が好奇心や探求心をもって見たり触れたりすることができるような環境構成をする

- **自然に触れて生活し、美しさ、不思議さに気付き、取り入れて遊べるような環境構成**
  子どもが「やりたい」と思った時にすぐに手に取れるようにする。（意図的に残した雑草、自由に場作りができるビールケース、自分たちで採った木の実を食べる）
- **生活に関係の深い情報に興味をもち、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えられるような援助**
  子どもの気付きに共感する。保育者は聞き手になる。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「10の姿」

思考力の芽生え　自立心　言葉による伝え合い

自然との関わり・生命尊重　**豊かな感性と表現**

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探求心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にする気持ちをもって関わるようになる。